

IV-45

中心市街地訪問の心理機構

東北工業大学 学生員 ○山崎 翔

金澤 雅之

正 員 青木 俊明

1. 序論

近年、モータリゼーションの進展や大型ショッピングセンターの郊外進出により、地方都市の中心市街地は衰退の一途を辿っている。そのため、利便性の低下や人口流出、社会基盤の効率低下等の問題が起きている。政府はこれらの問題を重要視し、TMO(Town Management Organization)設立や中心市街地活性化法策定に至った。しかし、活性化の兆しは見られない。

このように、中心市街地活性化は重要な社会問題であり、多くの研究者が研究を行ってきた¹⁾。これまで行われてきた様々な施策に対し、藤井²⁾はその多くが構造的なハード面の方略であり、人の心理面に触れたソフト面の方略が具体的に浸透していないと指摘している。そのような状況の中、青木³⁾は心理面に着目し、中心市街地への訪問行動を分析している。そこでは、中心市街地と郊外を比較し、中心市街地の訪問動機として人は購買動機の他に、精神充足や非日常体験を求めていることを明らかにされている。また、青木は中心市街地を活性化するためには、楽しさや気分転換等の快感情を生起させるアメニティー空間を演出する必要があることを提案している。しかし、青木の研究では快感情が生起されるメカニズムは明らかにされていない。そこで本研究では、中心市街地訪問の際に快感情を生起する心理メカニズムを明らかにする。また、得られた結果から中心市街地活性化方案のあり方を検討する。なお、本研究における中心市街地活性化は「商業地区の活性化」と定義する。

2. 仮説

Burn⁴⁾は、人間の行動は自己概念に規定されるとした。そのため、買い物等の行動もまた自己概念に規定されると考えられる。そのため、中心市街地や郊外のショッピングセンター(以下、郊外 SC)での買い物行動の結果として得られる快感情⁵⁾も自己概念の影響を強く受けると考えられる。中村⁶⁾は自己概念を形成する過程を自己過程とし、4つの位相を提案している(図-1)。4つの位相とは、自己に対して注意を向ける「自己注目」、自己を自分なりに特徴付ける「自己把握」、他者と比較して自己を評価する「自己評価」、自己を表現する「自己表出」である。そこで本研究では、自己過程理論に基づいて中心市街地と郊外 SC を比較することで快感情を生起するメカニズムを検討する。

まず、中心市街地では郊外 SC と比べて訪問者が多く、常に人の目にさらされるため、自己注目が高まると考えられる(仮説 1)。自己把握は自己注目の結果として起こるため、中心市街地では自己概念が確認されやすくなると考えられる(仮説 2)。さらに、自己把握することで自己評価する動機が高まるため、中心市街地では他者比較する傾向が強くなると考えられる(仮説 3)。他者比較した結果、自己概念が明確になるため、中心市街地では自己表出の傾向が高まると考えられる(仮説 4、仮説 5)。なお、心理学では自己表出を望ましい自己を表現する自己呈示とありのままの自己を表現する自己開示に区分される。

仮説 1 中心市街地では、郊外 SC より自己注目する傾向が高い。

仮説 2 中心市街地では、郊外 SC より自己概念が確認されやすい。

仮説 3 中心市街地では、郊外 SC より他者比較する傾向が強い。

仮説 4 中心市街地では、郊外 SC より自己開示する傾向が高い。

仮説 5 中心市街地では、郊外 SC より自己呈示する傾向が高い。

自己確証理論⁷⁾によると、人は都合の良い方向に比較した結果を解釈し、自己概念を強化すると考えられる。中心市街地での自己概念の強化が自尊心の高揚や不安の回避に繋がることが考えられる。従って、以下の仮説を想定する。

仮説 6 中心市街地では、郊外 SC よりポジティブな感情になる。

最後に、榎本⁸⁾によると、人は精神安定のため、自己開示を行い不満等の感情を発散させるという。また、中心市街地では自己開示の傾向が高いため、感情発散されやすいと考える。従って、以下の仮説を想定する。

仮説 7 中心市街地では、郊外 SC よりネガティブな感情が発散されやすい。

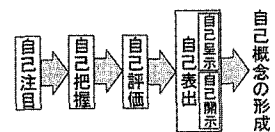


図-1 自己形成の過程

3. 調査方法

本研究では、手渡し配布、郵送回収による質問紙調査を行った。中心市街地の

表-1 質問紙調査の概要

	中心市街地	郊外
配布場所	電力ビル前バス停 商工会議所前バス停	ジャスコ仙台中山店
配布数	1000部	1000部
有効回答	422	437
回収率	44.0%	44.4%
男女比	26%:74%	36%:64%

場合、12月3日に仙台市青葉区一番町のバス停で、郊外SCの場合、11月26日にジャスコ仙台中山店で帰宅者を対象に調査票を配布した。調査概要を表-1に示す。

4. 分析結果

(1) 訪問先(中心市街地・郊外SC)の比較結果

自己概念の形成過程と快感情、中心市街活性化及び郊外SCの開発の是非に関する変数の各平均評定値を表-2に示す。各項目は5件法で測定した。表より、郊外SCに比べて中心市街地の訪問者の場合には、自己注目、自己把握、他者比較、自己呈示、自己開示、快感情、中心市街地活性化の是非の評定値は高い値を示していた。また、中心市街地に比べて郊外SCでの郊外SCの開発の是非の評定値は高い値を示していた。これらの値に対して、Welchのt検定を行った。その結果、全ての変数で有意差が認められた。これより、仮説は全て統計的に支持された。さらに、中心市街地の訪問者は中心市街地活性化を望む傾向が高く、郊外SCの訪問者は郊外SCの開発を望む傾向が高いことが統計的にも示唆された。

表-2 訪問先の比較結果

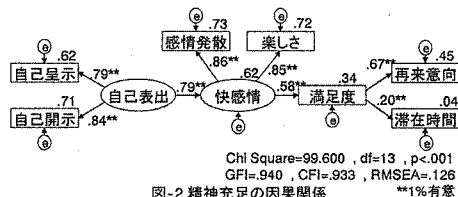
理論変数	平均評定値		有意性について
	中心市街地	郊外	
自己注目	3.56***	2.84	t(854)=12.58
自己把握	3.33***	3.04	t(853)= 5.74
他者比較	3.21***	2.45	t(856)=13.21
自己呈示	2.84**	2.26	t(836)=12.36
自己開示	2.83***	2.69	t(855)= 2.96
楽しさ	3.57***	3.24	t(855)= 6.74
感情発散	3.40***	3.12	t(857)= 5.15
中心市街地活性化	3.98***	3.69	t(856)= 5.13
郊外SCの開発	2.81	3.13***	t(823)=-4.92

***p<.001, **p<.01

(2) 快感情の因果

中心市街地訪問によって快感情が生起するメカニズムを検討するため、中心市街地訪問者のデータを用いて共分散構造分析(SEM)を行った。その際、観測変数にはこれまでの分析で用いた5件法の評定値を用いた。結果を図-2に示す。適合度指標は概ね良好な値であり、本結果は一定の信頼性を持つと言える。

分析の結果、自己表出から快感情へ有意なパスが認められた。このことは、自己表出が快感情の生起に影響を与えることを意味する。また、自己表出は自己概念の形成過程の位相の1つであることから、自己概念の形成が快感情の生起に影響を与えと言える。すなわち、自己概念の形成が滞在時間や再来意向を増加させることを示唆している。これは本仮説の妥当性を示している。



5. 考察

分析の結果、中心市街地を訪れる人は自己表出を行うことによって、楽しさや気分転換等の快感情を生起させることが示唆された。快感情の生起が中心市街地訪問の大きな動機であること³⁾を考えれば、中心市街地に多くの人が訪れるようにするためには、楽しさや気分転換などの快感情を体験できるような場所や空間を整備することが必要であると言える。特に、自己呈示や自己開示が行える場所や空間を整備することが重要であらう。

その一方で、例えば、人が多く賑わいがあるから楽しいと言うように、単に中心市街地訪問することで快感情が得られる可能性も考えられる。そのため、今回得られた心理メカニズムは中心市街地で得られる快感情の一部に過ぎないと思われる。

ところで、活性化の是非に関する分析では、中心市街地の利用者は中心市街地を、郊外SCの利用者は郊外SCを活性化させることを望む傾向が示唆された。このことから、郊外SCの利用者が増加している今、民意を反映した開発を進めると言うことは郊外SCの開発に繋がると考えられる。その場合、中心市街地の衰退に拍車が掛かることになる。従って、民意を全て反映させるような活性化策の提案には限界があると言える。

6. 結論

本研究では、中心市街地の快感情を生起する心理メカニズムを検証してきた。得られた知見を以下にまとめる。

- ・中心市街地では郊外SCより自己概念が形成されやすいという傾向が認められた。
- ・自己表出が快感情の生起に影響を与えていることが示された。

今後の課題として、中心市街地の訪問によって快感情を生起させる他の要因を検討する必要がある。

参考文献

- 1) 例えば、吉田朗:「マスタープラン中心市街地再生」,都市計画, vol.200, pp.17-20, 1999.
- 2) 藤井聡:「社会的ジレンマの処方箋-都市,交通,環境問題のための心理学-」,ナカニシヤ出版, 2003.
- 3) 青木俊明:「中心市街地の訪問動機とそれに基づく活性化方策の考察-宮城県仙台市を題材に-」,都市計画論文集, No.40-3, pp.643-648, 2005
- 4) 中村陽吉:「自己過程」の社会心理学,東京大学出版会, 1990.
- 5) Swann,W.B.&Read,S.J.:「Self-Verification Processes -He Sustain Our Self Conceptions-」, University of Texas at Austin, 1980.
- 6) 榎本博明:「自己開示の心理学的研究」,北大路書房,1997.